人がつながり集う場所

よろしく！人権のまちづくり ふれあい公園です

市営住宅の建て替えにともない、周辺整備事業として「ふれあい公園」が完成したのは昨年3月。その後「ふれあい祭り」や「グランドゴルフ大会」、地域の子どもたちやおじいちゃん、おばあちゃんが集った餅つき大会など多くの方が公園を訪れ、利用されています。ふれあい館も広い板の間で、地域の方々の集まりに使われています。

▲ふれあい館
建て替えにともない地域の集会所として建てられました

▶コンビネーション遊具
車いすからも滑り台に挑戦できるように台がついていますよ

いったんここに上ってから

▶公園には車イスでも使えるトイレがあります。公園全体も段差のないバリアフリーです

「人権のまちづくり事業」

住宅建て替え、公園の整備という一連の事業は「人権のまちづくり事業」として位置づけ、行政・地域住民代表・小板井1区・小板井2区・大崎区の各区長さんとで「人権のまちづくり小板井・大崎地区推進委員会」（以下人権のまちづくり推進委員会）を立ち上げ、事業の推進だけでなく、人権・同和問題の解決を目指して取り組んできました。

小郡には大小様々な公園が約120箇所あるのに、この地区には子どもが安心して遊べる広場や高齢者が集える場所がありませんでした。これからはこのふれあい館や公園が交流の場として活躍することでしょう。

事業を通した啓発

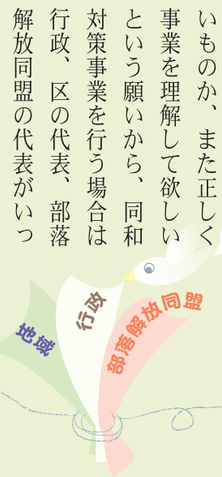
周辺地域と一体となって― 建設委員会方式

同和対策事業は、部落差別をなくすために「同和対策事業特別措置法」（一九六九年）の制定から法の裏付けをもって始められました。

小郡市では、同和対策事業は周辺地域にも関わる事業となるため、常に周辺地域との話し合いは必要でした。しかし、「被差別部落だけ良くなる」というねたみ意識が、事業実施にともなってでてきました。

そこで、事業を通して、市民啓発ができないものか、また正しく事業を理解して欲しいという願いから、同和対策事業を行う場合は行政、区の代表、部落解放同盟の代表がいっしょになって建設委員会を立ち上げました。

そして話し合いながら事業を進めるという建設委員会方式がとられるようになったのです。このことから、関係地域との連携、同和対策事業への理解を得ることができるようになっていきました。



石碑に込められた想い

ひとりは みんなの ために
みんなは ひとりの ために

ふれあい公園には、これまで同和問題・同和対策事業に関わった方々の想いが込められた石碑が地域の方々によって建てられていました。

35年間の同和対策事業への想い…事業を通して周辺地域といっしょによくなり、差別をなくしていきたい！

人権を大切にしたいと願う、小郡市の大きな財産です。

この「人権のまちづくりふれあい公園」には大きな願いが託されています

▲人権のまちづくりふれあい公園の石碑

「人権のまちづくり推進委員会」

人権のまちづくりの視点にたつということは、周辺の整備を図ることだけでなく、あらゆる差別意識を解消しようという願いを持つものです。多目的トイレや公園全体が段差のないバリアフリー化、車椅子からものぼって使える遊具などは、誰でも安全に利用できるように、「人権のまちづくり推進委員会」の話し合いで実現しました。

連携して事業を行う

地域、行政がいっしょになって事業を進める「人権のまちづくり推進委員会」の考え方は、同和対策事業が行われていた時代に、「建設委員会」という形で行われていました。

行政内部でも、教育啓発は同和教育課で、事業課は事業のみすればよいと考えられがちでした。しかし、同和対策事業を行う時、周辺地域と行政、部落解放同盟が共に連携し、話し合っていく中で、周辺地域と手を繋いで、いっしょによくなっていこうという、そして差別をなくす啓発に繋げていこうという想いがありました。

公園を利用したいときは？

市内の公園は、いつでも誰でも自由に使えます。ただし、イベント等に使う場合は、市役所まちづくり推進課施設・公園係に申し込みが必要です。ふれあい館については、都市計画課に申し込みください。

正しく知ることから

同和対策事業とすることで、一般事業と比べると市の財政負担は大きく軽減されてきました。

現在でも、まだまだ「あそこだけ…」といった見方をする人もいるかもしれません。同和地区だけでなく周辺地域まで含めた事業としての実績や市の財政負担の軽減など、「正しく知る」ことが差別解消への第一歩です。

次のページに同和対策事業の事例をいくつか紹介しています。これらの事業が行われる中で、部落解放同盟や周辺地域・行政関係者の方々の果たした役割の大きさや苦労は、はかり知れません。

そして、35年という永きにわたり、差別解消を願って活動してきた方々の想いが、今『人権のまちづくり』という「お互いを思いやる、手を差し伸べあえる、よきまちへ」という願いとなって息づき、次の世代へ引き継がれているのではないでしょうか。